

1. 活動報告（事務局 記）

—4月5日（日）総会を実施しました。26名の参加でした。欠席の連絡があった会員6名、欠席の連絡がなかった人・団体35名でした。欠席された会員の方で未納の方は会費1000円を早めに送付ください。おもな内容を報告します。

総会のしおりに沿って20年度の活動報告・収支決算報、21年度の活動計画案・活動予算案、第7回里山自然観察隊計画の説明があり、以上すべて承認されました。

A) 実りのある活動の項目で

①稲作リーダー 今井会長他（水管理 林会員）（耕運・脱穀 原田宗会員）

合鴨飼育をやめるため草取りの回数が増えること、またボランティア助勢活動をこれにあてるよう依頼する。

②里山自然観察隊隊長として西原会員とリーダー4名 他各スタッフ明記

今年から4回の観察と、田植、稲刈、餅つきのつくる会行事3回にして、隊員活動の回数を減少する。

③エコアップリーダー 前田会員

④ビオトープ現地・駐車場の草刈リーダー 吉富匡会員

⑤会報編集長 西原会員

B) 会報100回記念特集号作成

①11月号には会員多くの投稿を願い記載する。

C) 活動日の参集場所を基本的にビオトープ東屋とし、駐車場は湿地状態（車が滑る状態）を解消する土盛りをする。

D) 観察隊備品としてハンドマイク、トランシーバを購入する。

—4月 7日（火）たんぼの耕し、蕎麦田の仕上げ（2回目） 原田宗一会員機械オペレート提供

—4月18日（土）午前：会員18名、山大工学部学生応援4名計22名の参加でした。

エコアップとして、湿地帯の菅の刈り取り集積、タテバ血止め草（外来種）間引きを行い、湿地帯散策橋（通称八橋）の2mを修復しました。

午後 里山自然観察隊 隊員24名、保護者会員19名、指導者12名、計55名

他山口大学学生応援4名

初回のプレゼンテーション後、ビオトープに移動して、食べられる野草の収集と天ぷら試食春の昆虫採集後観察と講義をしました。

2. 今後の予定（事務局 記）

◎ 見学者

—5月20日（水）宇部市「たんぼぼの会」幹事 吉永博子さん他20名

—6月 6日（土）フジとキララネット子どもエコクラブ 吉富由起子さん他20名

—6月13日（土）福川子どもクラブ 大野教正さん他30名

◎ 行事

—5月3日（日）維持活動：エコアップ、草刈り

—5月16日（土）維持活動：水路の溝上げ作業、エコアップ、草刈り

3. 来訪者の声（ 東屋のノートより一部抜粋 ）

—3月29日—オタマジャクシがかわいかったよ。カエルになったらくるからね。

なかむらありさちゃん

—3月31日—とても楽しかったです。他6つの顔の絵がありました。

—4月17日—子供とつれてまた遊びに来ます。 阿知須 川端さん

※山口テクノパークから乗馬クラブ入口方面よりバイクに乗ってこられました前回は、新幹線のところで先がないと誤った判断をして折り返し、帰ったそうです。今回は再トライしてビオトープに到着し原田と出会っているいろいろと話をして大阪の出身で、こんなゆったりとした場所は初めてであり、子供も昆虫、へび等、大変好きで近いうち一緒に来るそうです。

4. 会員の声 「初夏の来たる」 （ 原田 満洲夫 記 ）

初夏到来、厚東川では、中心の清流から少し岸辺の淀んだ場所に、ま鯉が浅瀬で数匹産卵のため寄り添って泳いでいる。この時期は水もきれいですき透っている。

昭和山のNTTドコモの鉄塔では今年もミサゴが巣作りに空を飛びまわっている。人工物に巣作りとは大変貴重な状況でありあまり例がないとか？ すでにヒナが、ふ化したのか親の二羽が交互に飛びまわっている。4月15日に犬の散歩を兼ね市道から天つつみの横を通って昭和山に登ろうとした折、親ミサゴが警戒音を響かせて頭上を旋回しながら飛びまわるので、速さくとミサゴ育雛の邪魔しないよう山を下りた。夕暮れのミツバツツジの赤い花を鑑賞しながら、天つつみ土手でワラビを採取し帰途についた。今晚はその旬な“蕨”で一杯、季節はすっかり初夏である。

5. 里山自然観察隊 （4月18日、隊員24名、保護者19名、会員12名+学生4名）

春の観察（野草と昆虫）

第1回目なので、アイスブレイクとして、みんなでそれぞれ二人組になりジャンケンをして勝った人から自己紹介をしてもらい、次に負けた人の自己紹介で、その後別の人とジャンケンをすることを、3分間行い、ジャンケンに多く勝った隊員には賞品として飴をあげました。保護者もスタッフも全員参加で、結構盛り上がりました。

ビオトープへ移動して、例年通りにまず食べられる野草を探そうと、美濃和さんをお願いして2007年の資料を送ってもらい、隊員にビオトープで探してもらいました。（約30分間）

セイヨウタンポポ、ノアザミ、ハハコグサ、フキ、ヨメナ、ヨモギ、セイタカアワダチソウ、タネツケバナ、ウシハコベ、カラスノエンドウ、ノビル、ツクシ、ワラビ、セリ、アサザ、サルトリイバラ、アケビ、ヤマザクラ、カキノキ、ヤブツバキ（花）の20種とクズ、ナズナ、ツワブキ、オオバコ、オニタビラコ、シロバナタンポポの6種を見つけました。

次に昆虫採集です。昭和山入口までの道路を歩いて、春の昆虫を捕まえました。（約1時間）

【トンボ】アサヒナカワトンボ、タバサナエ、ニホンカワトンボ、シオヤトンボ、ムカシヤンマ、クロスジギンヤンマ、クロイトトンボの7種

【チョウ】ベニシジミ、ムラサキシジミ、ルリシジミ、ヤマトシジミ、ウラギンシジミ、ツバメシジミ、コムスジ、モンシロチョウ、モンキチョウ、アカタテハ、キチョウ、アゲハチョウ、ツマグロヒョウモンの13種

【バッタ他】ツチイナゴ、キリギリスのなかま、カメムシのなかま、コガネムシのなかま、ナナホシテントウムシ、ハムシのなかま、ゾウムシのなかま2種、ミツバチ、クロマルハナバチ、クマバチ、アシナガバチのなかまの12種

ビオトープへ戻って、捕まえた昆虫の名前を確認して逃がしてやり、その間にスタッフが作ってくれた野草の天ぷらをみんなで食べました。掘りたてのタケノコは少し残りましたが、その他の天ぷらはきれいに食べられました。ビオトープのシイタケも天ぷらにしました。

市民センターに帰って、昆虫などの名前を確認をして観察は終了しました。天候にも恵まれ、皆さん楽しい一日を過ごされました。

6. ビオトープ関連 (ビオトープのトンボたち) (管 哲郎 記)

(11) シオヤトンボ (トンボ科)

Orthetrum japonicum japonicum(Uhler)

ほとんど「シオカラトンボ」として認識されているかもしれませんが、春一番に出現する種でシオカラトンボよりも少し小さく、1ヶ月ほど早く3月半ばごろより出現し梅雨が終わる頃に居なくなります。シオカラトンボは4月より出現し11月頃まで見られるので、発生時期が重なるのでよく間違われることがあります。

平地から低山地部のため池や湿地、休耕地、水田などに生息していますが、周辺に樹林を必要とするようで、まったくの平地の水辺ではみかけないと思います。山際の池や湿地、水田やあぜなどでよく見られるはずですが、シオカラトンボとの違いです。

山に囲まれた水田の中を流れる溪流にもよく見られます、山林に近い流域にも生息するようで、ビオトープを流れる須賀河内川沿いにも5月ごろになると本種が多く見られるようになります。日本特産種でシオカラトンボ属のなかで一番小さく、北海道、本州、四国、九州地方に分布します。



若い♀



集団で休止する♂の群れ→



成熟した♂ シオカラトンボに似る



交尾連結するペア 右上(♂) 左下(♀)

7. 会よりの連絡事項 (事務局より)

4月18日の活動と観察隊の行事に、山口ケーブルビジョンから女性記者による取材がありました。放映はケーブルテレビにて、4月20・21日のソレーネという番組で、17:30～、19:00～、21:00～、23:00～、と計8回あり、25分の番組の中で約5分間、特集「里山ビオトープの会」として紹介されました。楽しそうな子供たち、一所懸命に作業をされているエコアップ活動や、何人かの方は記者からインタビューを受けておられ、私たちの生き生きとした活動がうまく伝わった内容だと感じました。

8. 編集後記

20年度は子ども会の会長ということで、なかなか参加できなく申し訳ございませんでした。忙しかった1年でしたが、田植え、稲刈り、収穫祭と二俣瀬の子ども達に、いろいろ体験をさせていただきありがとうございました。今年度は時間に余裕が出来るようなので、なるべく顔を出したいと思います。これからも宜しくお願いします。

(益田 真一 記)

会報も順調にいけば、今年の11月号では記念の100号になると思います。特別な記念号として、本のような形にするつもりはありません。しかし、折角ですので、皆さんの日頃の思いを沢山もらって、少し厚めの印刷物にはしたいと思います。まだ、半年以上ありますので、今から原稿をいろいろと考えて頂いて、締切期日前には提出できるように配慮願います。早いもので、発足からもう10年です。いろんな苦勞もありましたが、楽しいことも沢山あったと思います。記事もですが、写真も提供して頂いて、記念号に相応しい内容であって欲しいと思います。

(西原 一誠 記)

9. 特別寄稿 「二俣瀬ビオトープの活動を振り返って」

(美濃和 信孝 記)

3月末に千葉の実家に戻り、6年間のビオトープの活動に一区切りつけることになりました。この間、会員の皆様には大変お世話になり、この場を借りて厚く御礼申し上げます。今、この6年間の活動を振り返ってみて、自分の思い出に残ると同時に、会のために何がしかのことがやれたなと思うのは以下の三つの事項です。

1番目は、エコアップ活動です。最初は「エコアップ」と言ってもなかなか理解してもらえず、自分としても切歯扼腕の思いでしたが、次第にその目的と活動の内容が浸透して、今では会の主要な活動の一つとして位置づけられました。会の三大コンセプトについても、そのベースとなる里山の自然が豊かで健全な状態でないと十分に発揮されません。その里山の生態系を守る活動がエコアップです。外来生物、在来・希少生物を問わず、過剰繁茂、繁殖すればそれは生物多様性の低下と生態系の劣化につながります。生物多様性を計るものさしとして一般的に使われるのが、地域スケールでの種の多様性です。例えば、ビオトープの湿地にどのくらいの種類の植物が生えているか、これが一つの価値判断になります。それを増やしていくような方向で行う管理作業がエコアップ作業です。これには定式があるわけではなく、状況を見ながら試行錯誤していく順応的管理(順応的管理とは、plan-do-check-act サイクルを用いた管理方法)で対応するしかありません。2004年は、ミズキンバイ、アサザ、トチカガミ、デンジソウなどの希少植物が一気に出現した記念すべき年でした。どうしてこの年に急にこれらの植物が現れたのか、自然にはわからないことがたくさんあります。アサザのように、その後増えすぎて手を焼く希少植物もありますが、エコアップ活動をずっと続けていくうちに、このような新しい発見や、見えてくるものがあるに相違ありません。それを楽しみに継続的な活動を続けていってほしいと思います。

2番目は、二俣瀬の植物を紹介する記事の連載です。会報第27号から82号まで全56回、一度も休むことなく継続して載せることができました。この間に紹介できた植物の種類は120種を数

えまず(巻末の五十音順インデックスを参照ください)。この連載を始めようとした目的の一つは、自分自身の植物への知識をしっかりしようという意図からでした。写真ではなく、わざわざスケッチを描いたのも、葉の形や茎に生えている毛などの細部に至るまで自分の目で確かめて記憶に留めようという思いからでした。二つ目の目的は、たくさんの植物が身の回りにあるということを会員の皆さんにわかってもらいたい、ということです。そして単に植物の種類が多さをわかってもらうだけでなく、そこから派生してくる文化的なことまで理解していただきたいと思いました。人間は古来より身近な植物を食料、薬用や生活用品など、さまざまな形で利用し、植物は生活の一部として必要欠くべからざるものでした。そして、多様な植物を使いこなす技は一つの文化として伝えられてきました。しかしながら今ではその多くが忘れ去られようとしています。これからは、持続可能で健全な自然生態系と人間社会のあり方を模索していくことが人類の重要な課題になってくるはずです。かつての生活に根ざした人間と自然とのかかわり方は、その答えを探していくうえで重要なヒントを与えてくれるに相違ありません。

3番目は、里山自然観察隊です。西原隊長のリードのもと、その創設時からスタッフとしてかかわらせてもらいました。ビオトープが何のため、誰のためにあるかと考えたとき、それは会員のためでも地域住民のためでもなく、未来社会に開かれた窓としての役割が一番大きいのではないかと私は考えます。その意味で、里山自然観察隊は最も重要で理にかなった活動であると思います。里山の自然を保全・再生していくうえで忘れてはならないのは、その自然が社会の中で受け入れられるかどうかという視点です。昔は、人間の生活と密接にかかわることで里山の自然が維持されてきましたが、現代社会で里山の自然を持続的に維持・保全していくためには、新たな人間社会とのかかわり方を構築していく必要があります。われわれがビオトープの保全活動に汗を流しているのは、絶滅危惧種の動植物のためではなく、市民や未来社会に対して広く門戸を開き、社会へのかかわり方を求めていくことにほかなりません。里山の自然の新しい利用のしかたの一つが環境教育の場としての利用であり、中でも里山自然観察隊は最も重要な役割を担っているといえるでしょう。発足以来9年を迎えるビオトープをつくる会は、今年に入って「水環境文化賞」を受賞したり、マスコミに取り上げられる機会も以前に比べると格段に増え、社会的にもようやく認知されてきたことを感じます。これから、というときに去るのはたいへん残念ですが、今後も遠くからビオトープのことを気にかけて見守っていきたいと思います。

二俣瀬の植物 index

No.	種名	科名	掲載月	会報 No.
1	アオツツラフジ	ツツラフジ	2005年10月	51
2	アギナシ	オモダカ	2006年8月	61
3	アキノキリンソウ	キク	2004年11月	40
4	アキノノゲシ	キク	2006年11月	64
5	アサザ	ミツガシワ	2004年9月	38
6	アゼスゲ	カヤツリグサ	2004年5月	34
7	アゼナルコ	カヤツリグサ	2004年5月	34
8	アセビ	ツツジ	2005年3月	44
9	アマナ	ユリ	2007年3月	68
10	アラカシ	ブナ	2005年1月	42
11	アンペライ	カヤツリグサ	2006年6月	59
12	イボクサ	ツユクサ	2007年7月	72
13	ウツボグサ	シソ	2005年8月	49
14	ウメモドキ	モチノキ	2003年11月	28
15	ウラジロ	ウラジロ	2003年12月	29
16	エゴノキ	エゴノキ	2007年5月	70
17	エビヅル	ブドウ	2005年10月	51
18	オオアレチノギク	キク	2004年2月	31
19	オオイヌノフグリ	ゴマノハグサ	2005年2月	43
20	オオバヤシャブシ	カバノキ	2006年3月	56
21	オオフサモ	アリノトウグサ	2007年6月	71
22	オカトラノオ	サクラソウ	2005年8月	49
23	オギノツメ	キツネノマゴ	2006年9月	62
24	オニスゲ	カヤツリグサ	2004年5月	34
25	オニノゲシ	キク	2004年2月	31
26	オヘビイチゴ	バラ	2007年4月	69
27	カキツバタ	アヤメ	2006年5月	58
28	カキドオシ	シソ	2004年4月	33
29	カクレミノ	ウコギ	2007年12月	77
30	カサスゲ	カヤツリグサ	2004年5月	34
31	カスマグサ	マメ	2008年4月	81
32	ガマズミ	スイカズラ	2003年11月	28
33	カマツカ	バラ	2005年12月	53
34	カモノハシ	イネ	2007年8月	73
35	カラスノエンドウ	マメ	2008年4月	81

No.	種名	科名	掲載月	会報 No.
36	キキョウ	キキョウ	2004年7月	36
37	キシツツジ	ツツジ	2005年5月	46
38	キシヨウブ	アヤメ	2006年5月	58
39	キヅタ	ウコギ	2007年2月	67
40	クサネム	マメ	2005年7月	48
41	クチナシ	アカネ	2004年1月	30
42	クロキ	ハイノキ	2005年3月	44
43	クログワイ	カヤツリグサ	2006年6月	59
44	クロミノサワフタギ	ハイノキ	2005年12月	53
45	ゴウソ	カヤツリグサ	2004年5月	34
46	コオニタビラコ	アブラナ	2005年4月	45
47	コシアブラ	ウコギ	2004年3月	32
48	コシダ	コシダ	2003年12月	29
49	コナギ	ミズアオイ	2005年6月	47
50	コバノタツナミ	シソ	2008年5月	82
51	コマツナギ	マメ	2003年10月	27
52	サネカズラ	マツブサ	2007年2月	67
53	サワヒヨドリ	キク	2005年9月	50
54	シイモチ	モチノキ	2004年1月	30
55	シャシャンボ	ツツジ	2007年1月	66
56	ジュンサイ	スイレン	2004年6月	35
57	シリブカガシ	ブナ	2005年1月	42
58	シロドウダン	ツツジ	2004年12月	41
59	スイバ	タデ	2004年2月	31
60	スギ	スギ	2006年2月	55
61	スズメノエンドウ	マメ	2008年4月	81
62	セイタカアワダチソウ	キク	2004年11月	40
63	セリ	セリ	2005年7月	48
64	ソヨゴ	モチノキ	2006年1月	54
65	タカノツメ	ウコギ	2004年3月	32
66	タテバチドメグサ	セリ	2007年6月	71
67	タヌキモ	タヌキモ	2004年8月	37
68	タネツケバナ	アブラナ	2005年2月	43
69	タラノキ	ウコギ	2004年3月	32
70	チゴザサ	イネ	2007年8月	73

No.	種名	科名	掲載月	会報 No.
71	チャノキ	ツバキ	2008年2月	79
72	チョウジタデ	アカバナ	2007年9月	74
73	ツクシハギ	マメ	2003年10月	27
74	ツボスミレ	スミレ	2006年4月	57
75	ツユクサ	ツユクサ	2007年7月	72
76	デンジソウ	デンジソウ	2004年8月	37
77	トチカガミ	トチカガミ	2004年9月	38
78	ヌルデ	ウルシ	2007年11月	76
79	ネジキ	ツツジ	2004年12月	41
80	ネジバナ	ラン	2006年7月	60
81	ネズミサシ	ヒノキ	2006年2月	55
82	ノギラン	ユリ	2006年7月	60
83	ノコンギク	キク	2006年10月	63
84	ノジスミレ	スミレ	2006年4月	57
85	ノビル	ユリ	2007年3月	68
86	ハコベ	アブラナ	2008年1月	78
87	ハズナ	アブラナ	2008年1月	78
88	ハハコグサ	キク	2005年4月	45
89	ヒサカキ	ツバキ	2007年1月	66
90	ヒツジグサ	スイレン	2004年6月	35
91	ヒナギキョウ	キキョウ	2008年5月	82
92	ヒメシロネ	シソ	2006年9月	62
93	ヒメナミキ	シソ	2007年10月	75
94	ヒメヤシャブシ	カバノキ	2006年3月	56
95	ヒメユズリハ	ユズリハ	2006年12月	65

No.	種名	科名	掲載月	会報 No.
96	ヒヨドリバナ	キク	2005年9月	50
97	ヒルムシロ	ヒルムシロ	2004年6月	35
98	フキ	キク	2008年3月	80
99	ヘラオモダカ	オモダカ	2006年8月	61
100	ホソバタブ	クスノキ	2006年12月	65
101	マアザミ	キク	2004年10月	39
102	ミズアオイ	ミズアオイ	2005年6月	47
103	ミズキンバイ	アカバナ	2007年9月	74
104	ミゾカクシ	キキョウ	2004年7月	36
105	ミゾソバ	タデ	2004年10月	39
106	ミツバツチグリ	バラ	2007年4月	69
107	ムラサキサギゴケ	ゴマノハグサ	2004年4月	33
108	モチノキ	モチノキ	2006年1月	54
109	ヤクシソウ	キク	2006年11月	64
110	ヤツデ	ウコギ	2007年12月	77
111	ヤブツバキ	ツバキ	2008年2月	79
112	ヤマウルシ	ウルシ	2007年11月	76
113	ヤマジノギク	キク	2005年11月	52
114	ヤマツツジ	ツツジ	2005年5月	46
115	ヤマハゼ	ウルシ	2007年11月	76
116	ヤマハッカ	シソ	2007年10月	75
117	ヤマボウシ	ミズキ	2007年5月	70
118	ヨメナ	キク	2006年10月	63
119	ヨモギ	キク	2008年3月	80
120	リンドウ	リンドウ	2005年11月	52